

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 学生歌「青葉もゆる この
みちのく」をめぐって
東北大学名誉教授 阿座上竹四
- 6 資料の公開について
- 8 お知らせ

上：「萌野」全体像

中：さめのひれのような形状のフィン

下：ブレード三種。左から昭和初期の
「スタンダード」型、1980年当
時の「マコン」型、現在の「ビッ
グブレード」型

木造艇の到達点「萌野」

「萌野」は東北大学が1980年に建造し、ボート部が全日本大学選手権（インカレ）男子エイト種目で優勝した時に使用した艇である。当館で所蔵している「史料」の中でも最大で、全長は15メートル以上に及ぶ。ただし総重量は90kg程度で、軽量化の極みといえる。

木造艇の時代、船型は各競技団体が独自に設計していた。「萌野」は、当時東北大学ボート部監督だった堀内浩太郎氏（ローマ五輪、東京五輪の際は日本代表監督）の設計による「図南型」を採用している。接水抵抗を最小にし、そのために損なわれる安定性を補うために、独特の形状のフィン（船底に付けるひれ状の部品）を使用するなど、随所に独創性を見出せる。

1980年代は、競技用ボートの世界で素材の転換が始まり、東北大学でも「萌野」の次にはカーボンファイバー製のプラスチック艇を購入した。船大工が発注に応じて独自の船型で制作する時代の最後を飾る木造艇として、「萌野」は学生スポーツの記録を後世に伝えている。

※「東北大生の一世紀」展で展示中



学生歌「青葉もゆる このみちのく」をめぐって

東北大学名誉教授

阿座上 竹 四



まえおき

去る平成19年6月22日、東北大学創立100周年の記念日を迎えるに際し、公式ロゴマーク、スクールカラー、学生歌の制定式が行われた。その内、学章とスクールカラーは新たに選定されたものであるが、学生歌は従来から存在した6曲（後述）の中から最も多く歌われてきた曲として表題の1曲が選ばれた。この曲の作曲者として大変光栄なことと感激している。

この時にあたり、従来断片的には述べられてきたものの¹⁾²⁾、公式にまとめられた記録は存在しないことから、ここに至るまでの経緯などについて書き留めておきたいと考えた。まとめるにあたって多くの参考資料などに拠ったが、とくに清水廣行氏による「東北大学の学生歌について」³⁾によるところが大きい。記して感謝する。

学生歌制定の経緯

東北大学は、戦後の学制改革により昭和24年東北帝国大学を中心とする旧制二高、仙台工専、宮城女専、宮城師範など、国立諸学校の統合によって誕生し、新制東北大学の第1回卒業生は昭和28年に社会人となった。しかし統合後のキャンパスは市内に数多く点在し、1, 2年生が通う教養部も3ヶ所に分散している状況であった。したがって当時の心ある学生、教職員は大学統合のシンボリックなものを求める気運が強かった。その一例として、東北大学新聞の学生歌決定に際してと題する論説によると、「従来口にする歌は、旧制高校の寮歌、逍遥歌などの他、内外の民謡、クラシックなどに限られている。皆でいつでもどこでも歌える歌がないという学生の要望を入れて、今般学生部が学生歌の作詞、作曲の募集を行ない、これが制定されることは本当に我々の心を充たしてくれるものだ。我々はこの学生歌を高らかに歌おうではないか」と述べている。⁴⁾

学生部による公募は、まず歌詞の募集に始まり、入選歌詞3編に対して作曲を募集するという独特の手順で進められた。そして昭和28年10月31日、本部中央講堂に約700名の教職員、学生を集め、学友会学生歌選定委員会の審査を経て入選決定した学生歌3編が発表された。渋谷伝講師の独唱による披露と福井文彦講師



昭和28年の入選者3組

前列左より 阿座上竹四、木下学生部長、浅川課長、野田 秀

後列左より 戸田靖男、染谷 昇、田中喜勝、目黒保行

による歌唱指導が行われ、全員の投票により1～3位が決定された。第1位は「青葉もゆるこのみちのく」で289票、第2位が「陸奥の青葉の都」で140票、第3位が「緑萌えたつ高き山脈」で122票であった。

この後、昭和30年11月に「若さはからだに」が、さらに昭和32年には「歌に歌を」が制定された。当時、学生部では、1年おきに学生歌を制定するという考え方があった様で、昭和34年11月にも作詞が募集され、審査の後、作曲募集が行われたが入選作なく、結局昭和35年4月に福井文彦氏の作曲により新曲が発表された。これ以後学生歌の募集は行われていない。

これまで制定された学生歌6曲をまとめて表に示す(右下参照)。ほかにこれらに類する歌として昭和33年に応援歌が公募制定されているので、併せて表に示した。現在では、これらのうち「青葉もゆる…」を除くと、あまり歌われていない様で、他の曲の存在すら承知していない卒業生や学内人が多い。しかしながら「陸奥の青葉の都」は応援団で歌われているし、また学友会合唱部では、男声合唱団が「青葉もゆる…」を、混声合唱団が「緑なす平和の学園」をそれぞれ開演テーマ曲として演奏しており、旧女声合唱団は女性の作詞、作曲による「歌に歌を」を演奏していたという。

それぞれの学生歌について

昭和28年、最初に制定された3曲はいずれも軽快なリズム感に満ちた曲で、「青葉もゆる…」は当初ハ長調で作曲されていたが、福井文彦氏により、より歌い易い様にと半音上げて変ニ長調に移調された。3曲いずれもピアノ伴奏譜がつけられ、男声4部合唱にも編曲されて学生部と男声合唱団の手によりコロムビアからSP盤レコードとして製作され頒布された。その後、応援団によるソノシート、生協による記念LP盤、工学部資源工学科の10周年記念レコードとして岡本敦郎の独唱によるSP盤などが作られている。最初の入選3曲の作詞、作曲者6名と木下彰学生部長(経済学部教授)、浅川淑彦厚生補導課長の記念撮影、中央講堂における高橋里美学長による表彰式、賞状、賞品等の写真を示す。因みに金一封の中身は金5,000円也であった。これは当時大学授業料が年額3,600円から6,000円に値上げされたばかりであったことや、公務員の平均給与ベースが6,300円といわれたことなどに比べて、決して少ない額ではなかったと言える。

「青葉もゆる…」はまた会田高陽名誉教授(故人)により、中国の留学生のために中国語にも翻訳されている。昭和32年の創立50周年式典では、参加者一同声高らかに「青葉もゆる…」を歌ったという記事があり、入学式、卒業

東北大学学生歌として選定された曲一覧

1	青葉もゆるこのみちのく (昭和28年制定 第1位) 法学部 野田 秀作詞、工学部(二教) 阿座上竹四作曲、 福井文彦編曲
2	陸奥の青葉の都 (昭和28年制定 第2位) 法学部(一教) 田中喜勝作詞、文学部 戸田靖男作曲、 福井文彦編曲
3	緑萌えたつ高き山脈 (昭和28年制定 第3位) 文学部(一教) 染谷 昇作詞、理学部(一教) 目黒保行 作曲、福井文彦編曲
4	若さはからだに (昭和30年制定) 法学部 鈴木 勲作詞、経済学部大学院 早坂啓造作曲、 福井文彦補修編曲
5	歌に歌を (昭和32年制定) 文学部 中鉢敦子作詞、教育学部 小笠原嶺子作曲、福井 文彦補修編曲
6	緑なす平和の学園 (昭和35年制定) 工学部 住山一真・教育学部 皆川秀雄作詞、福井文彦作 曲
応援歌 おお東北大の旗はひるがえる (昭和33年制定) 工学部 前川一郎作詞、高橋 亨作曲	

※一教=第一教養部(旧第二高等学校内)、
二教=第二教養部(旧仙台工業専門学校内)

式においても歌われるようになって、この曲が次第に東北大学学生歌の代表として広く受け入れられるようになったと思われる。その歌詞を作詞した野田 秀氏は法学部在学中にクリスチャンとなり、現在も東京で牧師として多忙の日を送っている。

昭和30年制定の「若さはからだに」は前述の1年おきにとの線にそって公募制定された。その次の昭和32年は創立50周年に当たっており、その記念と銘打って公募されたが、結果的に54編の歌詞応募作に入選作なく、内6編を選んで応募者に改作を依頼した末に、選定委員会が加筆訂正して準入選となった「歌に歌を」の歌詞に対して作曲を募集し、59編の応募作の中から入選作が選ばれた。最後の学生歌となった「緑なす平和の学園」は、歌詞については42編の中から工学部住山一真氏と教育学部皆川秀雄氏の共作である「ゆたかなみちのく」が選ばれ、作曲が公募されたが応募7編に入選作なく、再募集による19編にも良作が見当たらず、結局翌35年になって福井文彦氏が自ら作曲し、題名も歌詞の中からとって「緑なす平和の学園」と改めて漸く披露されるという紆余曲折があった。

創立100周年と学生歌

今回、創立100周年記念日を期して「青葉もゆる…」が大学公式の学生歌として追認された形となった。どう理由によるのかははっきりはしないが、どの国立大学においても現在に至るまで校歌を持っていないという中であって、学制改革直後の混乱期であった半世紀前から、公式に次々と学生歌を制定してきた東北大学の関係者の先見性と熱意に改めて敬意を表したい。

これらの学生歌はいずれも学生部の事業として公募され、学友会学生歌選定委員会の審査を経て制定されており、それぞれの時点で学長（学友会長）による表彰が行われた、いわば公認の歌である。「青葉もゆる…」が、その中でも長い年月にわたって学生、教職員に広く愛され、歌い継がれて来たことから、学生歌の代表曲として改めて認定されたものと受けとめたい。

その歌詞にある「我等こそ国の礎、…世界の要、愛もて求むる真理の目標」は新生国立大学法人東北大学のあるべき理想の姿を映して余すところがない。

ともあれ、すべての学生歌、応援歌は長い年月をかけて出来上がった貴重な大学の財産である。いろいろな機会に歌われ、広められてより多くの人びとに愛唱されることを心から希望して結びとしたい。



高橋学長による表彰式（受賞者は筆者）



賞状、賞品

資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成19年（2007）4月から8月までの間に目録を新たに公開した主な文書は、以下の通りです。

資料目録は当館閲覧室に備え付けてある他、当館ホームページ（<http://www.archives.tohoku.ac.jp>）の「東北大学史料館蔵 個人・関連団体文書目録」よりPDFファイルで入手することができます。

※個人に関する情報の保護等のため、閲覧を一部制限する文書があります。

石崎政一郎文書 I（法文学部勤労働員関係文書） 52点

石崎政一郎（1985～1972）は、1934（昭和9）年から1959年（昭和34）まで本学法文学部及び法学部に在職した、労働法を専門とする法学者。本学退職後は立教大学・上智大学等で教鞭を執った。石崎教授は戦時中、1944年（昭和19）10月法文学部入学者を対象に実施された、群馬県伊勢崎市の中島飛行機工場における法文学部学生勤労働員の指揮にあたっており。今回公開する資料は、この伊勢崎への動員を中心とする、法文学部学生の勤労働員に関する資料である。



伊勢崎隊の内務日誌簿

この資料群は「東北帝国大学報国隊」で作成・授受された公文書で、その内容は二つに大別される。一つは仙台の東北帝国大学報国隊第四大隊（法文学部）において収受された文書で、伊勢崎への勤労働員計画等に関するファイルや、伊勢崎からの現地報告書、現地への指示文等の写し、学徒報償金交付関係書類などが含まれる。もう一つは、動員先の伊勢崎で事務にあたった「伊勢崎隊」の文書であり、執務処が収受した文書の簿冊、隊員名簿、日誌、勤労状況の調査書類など現地で作成・保存されたもの。いずれも本学における学徒勤労働員の実態が克明に記されたもので、本学の歴史のみならず、帝国大学の学徒勤労働員に関する貴重な記録である。

阿刀田令造文書 30点



阿刀田令造（1878～1947）は、旧制第二高等学校において教授・校長をつとめた歴史学者・教育家。宮城県立中学校（現仙台一高）から第二高等学校に進み、東京帝国大学文学部・京都帝国大学法科大学に学んだあと1910年（明治43）に母校第二高等学校に教授として赴任。1932年（昭和7）から1943年（昭和18）まで第9代校長をつとめ、二高の「名物校長」として知られている。西洋史を専門とする一方、地元仙台的郷土史研究にも大きな足跡を残し1930年（昭和5）年には「仙台郷土史研究会」を結成。戦後1946年（昭和21）に仙台市公民館初代館長に就任している。

資料は、(1) 日誌・ノート類と (2) 自筆原稿類、(3) 写真、(4) その他に大別され、(1) には旧制二高在学中の日誌、東京帝国大学在学中の日誌や講義受講ノート、京都淑女高等女学校（現在の京都市立紫野高校）の授業日誌（京大在学中か）と、二高退官後の昭和20～22年の日誌・手帳類が含まれる。明治期における学生生活の実態や戦中戦後の文化・知識人の活動を考える上での貴重な資料であり、同時に「学都」仙台の歴史を考える上でも貴重な価値を持つ良質の資料である。



二高在学中 明治34年5月の日記
晩翠先生の洋行記念写真を撮影したことが記される

◆ 東北大学動画アーカイブズ「川内記念講堂落成式」の公開

「東北大学メールマガジン」第7号（2006年春号）にて、1960年（昭和35）10月に挙行された川内記念講堂落成式の映像が電子化され配信されています。まだ現在のような形で整備される以前の川内キャンパスの中に、創立50周年の記念建造物として建設された記念講堂の真新しいすがたを見ることが出来ます。

また前号で紹介した「ニールス・ボーア博士のみた東北帝国大学」（1937年のニールス・ボーア来学時の記録映像）、「東北大学創立50周年記念式典」（1957年）の映像についても、あら

ためてナレーション付きの動画として公開・配信されています。動画映像は史料館ホームページのほか、東北大学メールマガジンのページ（下記）からも閲覧できます。

<http://www.alumni.tohoku-university.jp/2007/spring/index.html#100th>



史料館のうごき

○『東北大学史料館紀要』第2号の刊行

2007年3月に『東北大学史料館紀要』第2号が刊行されました。東北大学の学徒出陣・学徒動員に関する特集号として、「通年動員態勢下における学徒勤労働員-東北帝国大学法文学部伊勢崎隊」（徳竹剛）、「戦時下の大学院特別研究生制度と東北大学」（吉葉恭行）、「東北帝国大学の「学徒出陣」」（永田英明）の3本の論考や平成17年度企画展「「学徒」たちの「戦争」—東北帝国大学の学徒種出陣・学徒動員—」の展示記録等が掲載されています。頒布ご希望の方は当館までご連絡ください。

○「東北大学の至宝」展に史料館の所蔵資料が出陳されます

本学創立100周年記念展として開催される「東北大学の至宝-資料が語る1世紀」展（9 / 1 ~ 10 / 14：江戸東京博物館、11 / 2 ~ 12 / 9：仙台市博物館）に、附属図書館や総合学術博物館等で所蔵する貴重資料とともに、当館所蔵資料の中から資料が出陳される予定です。特に仙台市博物館では、安井曾太郎の代表作「T先生の像」など、当館の常設展示等では見ることが出来ない貴重な資料も公開されます。この機会に是非ご覧下さい。

主な出陳予定資料（○は仙台会場、◎は仙台・東京会場で展示予定）

- 東北帝国大学への女子入学に関する文部省の質問状（1913年）
- 東北帝国大学開学式の図書展示に関する狩野亨吉書簡（1913年）
- 安井曾太郎筆「T先生の像」（1934年 玉虫一郎一二高校長像）
- 児島喜久雄筆「中村部長記念像」（1932年 中村善太郎法文学部教授像）
- ◎仙台医学専門学校で使用された日露戦争幻灯タネ板（魯迅関係資料）ほか



安井曾太郎「T先生の像」

○法人文書の評価選別作業を行っています。

当館では、「国立大学法人東北大学法人文書管理細則」に基づき毎年保存期間を満了した法人文書のなかから「本学の歴史に関する資料的価値」を評価選別し移管を受けています。今年度も平成18年度末で保存期間を満了した法人文書を対象に評価選別・移管作業を進めています。

記念展

「東北大生の一世紀」を開催しています

東北大学は、1907年6月に国内3番目の大学「東北帝国大学」として誕生して以来、今年で創立100周年を迎えました。この展示会では、過去100年の間にこの東北大学で青春を過ごした学生たちの歴史を、史料館に残されている写真や資料約300点を通じて紹介いたします。明治以来「学都」と呼ばれた仙台の地に全国から集まった学生たちが、この東北大学のキャンパスで何をどう感じどう生きたのか。東北大学史料館に集められた様々な資料を通じて、大学生の歴史を見つめてみませんか。

- 東北帝大の誕生と学生たち
- 戦争と東北大生
- 戦後社会の変化と東北大生
- 帝大生の学生生活
- 戦後復興と学生のチカラ
- 「トンペイ」学生の歲月

会 期 2007年7月28日(土)～12月9日(日)

開館時間 10:00～17:00

特別開館日 (東北大学創立100周年記念イベントとの同時開催など)

7/28(土)・29(日) 片平まつり2007(東北大学片平・星陵キャンパス)

8/25(土)・26(日) 東北大学100周年記念まつり(東北大学片平キャンパス)

10/6(土)・7(日) 第1回東北大学ホームカミングデー

11/3(土)・4(日) 創立100周年記念展「東北大学の至宝」(仙台市博物館)

12/8(土)・9(日)

※ その他の土・日曜日・祝日及び8/13～16は休館となります



東北大学史料館だより 第7号 2007年9月1日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217)5040

E-mail kinen1@mail.tains.tohoku.ac.jp URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp>